『物類称呼』の見出し語（下）

―地域性と歴史性―

山　県　　浩

目　次

1．はじめに
2．調査対象・方法
3．歴史性
4．地域性
41．東西分布類（以上、前号）
42．西日本分布類
43．東日本分布類
44．無分布類
5．おわりに

42．西日本分布類（A類）

［1］西日本分布類は、『物類称呼』が江戸で出された資料でありながら、現代方言で西日本に特徴的に分布する見出し語として問題が少なくない。

更にA類の見出し語7語はすべて現代共通語形と一致しないⅡ類である。このため、対応する現代共通語形の地域性なども検討しなければならない。

歴史性の点でA類は特徴①〈和名抄などの用例〉の見られる見出し語3語とそれ以外の古辞書類に用例の見出しがたい見出し語4語に二分された。これは事物の歴史の問題と考えられるが、それ故にまた見出し語として選択された背景も複雑なようである。

［11］A類の見出し語7語は、西日本分布類だけに西日本に広く分布する。

しかし、東日本に全く見られない訳でなく、またすべてが西日本にまとまった分布領域を持つ訳でもない。

西日本の分布にしても、1語（項目6「きびす」の見出し語）は京阪に見られるが（a型）、他の6語（項目4「まゆ」・22「なんばんきび」・23「りうきういも」・26「ぼうふら」・29「たけ」・35「いかのぼり」の見出し語）は京阪に見られない（n型）。

このような分布状況を踏まえ、A類の見出し語が近世後期に関東・東日本でどのように分布していたかを考えてゆかねばならない。特に江戸でどのように使われていたかは、見出し語として選択された背景を考える場合、重要な問題となる。[注12]

［12］西日本に分布する見出し語に対して東日本に広がるのは、どのような言い方であるか、特に歴史的に見て東日本固有の言い方か、見出し語より一昔前の京坂の言い方かなどについて注意する必要がある。

この場合、3章［51］項に示した如く対応する現代共通語形が東日本に広がることが多い。共通語的性格を有することばの歴史的変遷の問題として東日本に広がる言い方がなぜ見出し語として採用されなかったかなども考えておかねばならない。

［2］項目6「きびす」の見出し語はA類唯一のa型で、『物類称呼』で「関西」の言い方とされる。

〈キビス〉は紀伊半島南部を除く近畿地方を中心に富山・石川・福井・岐阜の一部及び中国全域・九州北部に連続して広がる。本稿で「西日本」とした富山県・石川県・福井県・滋賀県・三重県以西にほぼ限られる上、西日本に広く分布する点で、典型的なA類である。

西日本は他に紀伊半島に〈（アシノ）トモ〉や福岡・佐賀以外の九州・沖縄にアド類が見られる程度で、全国的にも〈キビス〉の分布領域が最も広い。

東日本にはいろいろな変種が見られ、中でも東北全域に広がる〈アグト〉が最大の領域を有する。現代共通語形〈カカト〉（B類・b型）は東京を含む関東の西半、〈カガト〉は関東の東半に限られる。その他、〈アクト・アクド〉が群馬北部・新潟、〈アッコ（イ）・アックイ〉が山梨・長野・岐阜南部にまとまるなど、多彩である。

［21］『物類称呼』には「関西にて・きびすと云　関東にて・かゝとと云…」（31頁）とあり、現代と同じ対立が認められる。

江戸での〈カカト〉は、各地の方言形に対して江戸語が対比・対照してあると言われる方言集（『浜荻（庄内）』85頁・『御国通辞』13頁・『浜荻（仙台）』451頁・『仙台方言』667頁・『方言達用抄』177頁）すべてでこの言い方が見られる点からも安定したものであったことが伺える。ただ、『はまおぎ〈久留米〉』では「きびしゃ（かゝと　きびす　訛也　踵〈クビス・右ルビ〉くびすといふべし）」（39オ）の如く見出し語も見られるが、〈カガト〉も併記してある。

古辞書類で〈キビス〉は中古期のものから殆どすべての資料に見られるが、〈カカト〉は『和英語林集成（初版・二版・三版）』だけである。つまり、『和英語林集成』和英の部には〈キビス〉〈カカト〉、更に後述の〈クビス〉が見られる（但し、英和の部「HEEL」の項では、初版・二版〈カガト〉、三版〈カカト〉で、〈キビス〉は見えず、和英の部になかった〈カガト〉が示される）。

『日本国語大辞典（二版）』によると、〈キビス〉は「大智度論天安二

年点」（八五八）からで歴史は深く、〈カカト〉は「書言字考節用集」（一七一七）からで前田富祺氏も「近世になって東国系の語として出てくるもの」（前田一九八五　685頁）とされる。

右の如き〈キビス〉の歴史の深さを考えると、京坂でもくつろいだ場面だけでなく、改まった場面でも使われていたようである。従って、江戸では「関西」の言い方として一定の地域色は存するが、在来の言い方である〈カカト〉と使い分けられる「いい言葉」という側面も持ち合わせて受け入れられていたと考えられる。

［22］『物類称呼』の見出し形式は「跟　きびす（くびす）」で、副見出し語に「くびす」が示される。

正倉院文書（七四〇）から見られる歴史の深い言い方で、中古から近世に入るまで俗語とされる〈キビス〉に対し、一般的・正しい形として使われていたと言う（前田一九八五）。『和英語林集成』でも見出しに立てられ、特別な符号は付されていないが、前田氏は同書で「雅語的なもの」（同　685頁）と捉えられていたと判断される。

『物類称呼』の〈地域―方言形〉の記述にも見られず、現代方言でも一般的でないため[注13]、近世後期には京坂・江戸とも〈キビス〉より上位場面、或いは特殊な書き言葉だけで使われる言い方になっていたようである。前掲『はまおぎ（久留米）』の説明の記述「踵（クビス）くびすといふべし」も、このような性格の現れと言える。

［3］A類・n型の各項目で、LAJにおいて京阪・東京に見られる言い方は、次の如くである。

東京は問題ないが、京都と大阪で言い方の異なることがある。このとき、両方揃って見出し語の見られることを京阪分布の条件としたため、京都或いは大阪のどちらかに見出し語の存する場合がある[注14]。

項目4「まゆ」　京阪〈マユゲ・マイゲ〉―東京〈マユゲ・マミヤ〉

項目22「なんばんきび」　京都〈ナンバ〉・大阪〈ナンバキビ〉―東京〈トーモロコシ〉

項目23「りうきういも」　京阪〈サツマイモ〉―東京〈サツマイモ〉

項目26「ぼうふら」　京都〈カボチャ〉・大阪〈ナンキン〉―東京〈トーナス〉

項目29「たけ」　京都〈マッタケ・キノコ〉・大阪〈タケ〉―東京〈キノコ〉

項目35「いかのぼり」　京阪〈イカ〉―東京〈タコ〉

n型とは言え、西日本分布類であるため、項目22・29・35の如く見出し語がほぼそのまま、又はその変化形が京阪に見られる。しかし、いずれの見出し語も近畿地方の周辺地域または西日本の周辺地域に分布する点で共通する。

一方、東京の言い方は、項目26の〈トーナス〉を除くと、すべて現代共通語形で、項目4・23・29では京阪にも見られる。

［31］近畿中央に広がる変種の周辺地域に見出し語が分布するのは項目22「なんばんきび」・29「たけ」・35「いかのぼり」である。

京阪での衰退が近年であったためか、n型としたが、京都と大阪で分布に違いが存し、項目22・29では大阪に見出し語が見られる。

［311］項目22「なんばんきび」

見出し語〈ナンバンキビ〉は静岡と愛知の県境域・兵庫及び京都北部

など、近畿全域・岡山・徳島に広がる〈ナンバ〉の周辺にまとまる。その他、長野南部・岐阜・石川・福井西部・広島・山口などにも点在する。

「東日本」に有力な分布域の一つが存するが、全般に密度は低く、連続した領域がないため、A類ながらN類に近いところも存する。

西日本では、ナンバン類とその周辺地域（九州・四国・北陸など）に広がる〈ト(ー)キビ〉〈キビ〉が拮抗した分布領域を持つ。東日本では、関東南部の現代共通語形〈トーモロコシ〉（B類・b型）を初めとして〈キミ〉〈トーミギ〉〈モロコシ〉など、各地に有力な方言形が分布する。

『物類称呼』には「畿内にて・なんばんきび ヌ 菓子（くはし）きびと云 … 東国にて・たうもろこし」（77頁）とあり、当時京坂ではまだ〈ナンバ（キビ）〉が一般的でなかったこと、今日の東西対立の原型がすでに出来ていたことなどが分かる。しかし、『浪花聞書』「南蛮（ナンバ）きび　（とうもろこし也）」（13頁）・『東京京阪言語違』「唐（たう）もろこし　難波（なんば）きび」（378頁）などから、19世紀前半には今日の大阪の状況が伺える。

なお、古辞書類では〈ナンバンキビ〉は『恵空本節用集大全』のみ（但し、〈ナンバ〉は『和英語林集成（初版・二版・三版）』に用例）、〈トーモロコシ〉は『和英語林集成（初版・二版・三版）』のみである（英和の部「MAIZE」の項では、初版・二版〈トモロコシ（ママ）〉〈ナンバ〉、三版〈トーモロコシ〉である）。『日本国語大辞典（二版）』でも伝来の新しさを物語るように〈ナンバンキビ〉〈トーモロコシ〉とも17世紀後半からの文献に見られるだけである。『江戸語の辞典』には〈トーモロコシ〉は見られるが、〈ナンバン〉〈ナンバンキビ〉は見られない。

近世後期当時くつろいだ場面の言葉として〈ナンバンキビ〉は京坂を中心に一定の勢力を有していたことは間違いなかろう。しかし、江戸では、上方語であるという意識を伴い、限られた場面で使われるか、或いは理解語に止まっていたと予想される。

対応する現代共通語形〈トーモロコシ〉は当時江戸の話し言葉で普通に使われていたと考えられる。『御国通辞』『浜荻（仙台）』でも「まめきみ」「たうきみ」に対して江戸の言葉として示してある。ただ、『物類称呼』で「東国」の言い方とされるが、LAJでは関東南部に限られる。近世後期にはその分布領域はより狭く、江戸周辺だけだったかもしれない。また『常陸方言』「トウギミ　江戸ニテ唐モロコシト云フハ、ヒガコトナリ」（48頁）という捉え方はこの言い方が江戸で場面的・階層的に限られていることを示すものかもしれない。時代は下るが、大槻文彦『言海』では〈ナンバンキビ〉の方を正規の言い方とする記述が見られる。[注15]

［312］項目29「たけ」

見出し語〈タケ〉は、三重及び兵庫・鳥取・島根・岡山・愛媛北部など、近畿中央に広がる〈マッタケ〉を取り囲んで分布する。また両語形の境界地域に〈クサビラ〉が点在する。

近畿周辺では近畿西部・中国東部のまとまった領域のため、この三語形の中では〈タケ〉が最も広い。ただ、西日本全体になると、中国西半・四国西半から九州・沖縄に分布する〈ナバ〉が最も広い分布領域を持つ。

しかし、全国的には現代共通語形〈キノコ〉（B類・ab型）の分布領域が最大である。即ち、東日本のほぼ全域に広がるが、西日本では近畿以外に山陰・四国・九州南部にまとまる。分布状況から〈キノコ〉の方

が〈タケ〉より古い言い方と解釈できる。

しかし、古辞書類では〈キノコ〉が室町期以降のものに幾つか拾える程度で、〈タケ〉は中古期のものから見られる。『日本国語大辞典（二版）』も同様で、〈キノコ〉は15世紀後半の文献からであるが、〈タケ〉は「日本書紀」の古訓や「十巻本和名抄」など、中古期の文献から見られる。この点について『解説5』には解釈が見られないが、「竹」のアクセントとの関係で【茸】の〈タケ〉は近畿周辺に限られたとの解釈がある（佐藤編一九八三　9巻・290～291頁）。

『物類称呼』には〈タケ〉〈キノコ〉とも使用地域は記されていないが、見出し形式には「菌茸　たけきのこ」の如く見出し語と副見出し語で並べられている。また『和英語林集成（初版・二版・三版）』和英の部でも両語形と後掲の〈クサビラ〉が同じように扱われている（英和の部「MUSHROOM」の項では、初版・二版〈タケ〉〈クサビラ〉、三版〈キノコ〉〈ハツ〉の如く扱い方が異なる）。

ただ、従来の研究やLAJの分布状況から江戸のくつろいだ場面で〈キノコ〉が一般的であったことは明かであろう。しかし、改まった場面や書き言葉になると、〈タケ〉や〈クサビラ〉が使われていたかもしれない。

一方、近畿中央の〈マッタケ〉は『日本国語大辞典（二版）』等でも【茸】の意の用例が見られない。限られた場面・階層ではすでに使われはじめていたかもしれないが、近世後期京坂のくつろいだ場面では、「近世末まではクサビラが〈きのこ〉を表す語形として使用されていた」（佐藤編一九八三　9巻・288頁）の如く、〈クサビラ〉が一般的であったようである。一方、〈タケ〉はすでに改まった場面や書き言葉に限られていたと考えられる。

［313］項目35「いかのぼり」

見出し語〈イカノボリ〉は岐阜北部・福井・京都北部・鳥取・岡山北部・大分など、北陸・近畿中央・中四国の一部に広がる〈イカ〉の周辺に点在する。その点でA類と分類したが、N類的な分布密度の低さが見られる。

全国的には現代共通語形〈タコ〉（AB類・b型）が東北東半を除く東日本全域の他、近畿南部・山陰・四国の大半・九州東半など、イカ類の周辺に広がって最大の領域を持つ。〈イカノボリ〉〈イカ〉を同系統としてまとめてもその分布領域は〈タコ〉のそれに遠く及ばない。

なお、全国的な分布状況から〈タコ〉の方がイカ類より古い言い方と考えられる。しかし、『日本国語大辞典（二版）』でもともに17世紀の文献からで、古辞書類も含め、文献で先後関係を確認することはできない。

『物類称呼』では「畿内にて・いかと云　関東にて・たこといふ…」（122頁）の如く現代と同様の対立が捉えられているが、見出し語の使用地域は記されていない。

ただ、『浪花聞書』「いかいかのぼり也　江戸でたこといふ…」（2頁）・『守貞謾稿』「京坂にては、いかのぼりと訓じ、下略して、いかと云ふ」（④297頁）・『はまおぎ（久留米）』「いかたこ　小児の専もてあそぶ品也　凧巾（イカノボリ・右ルビ）紙鳶（上二同・右ルビ）…」（2オ）などの記述から京坂・江戸ともに〈イカノボリ〉はくつろいだ場面で使われず、改まった場面や書き言葉に限られていたことが分かる。また『江戸語の辞典』に〈イカ〉は見えず、〈イカノボリ〉は「客者評判記」（一七八〇）の用例が示され、「上方借用語」と記される。

『和英語林集成（初版・二版・三版）』で〈イカノボリ〉は和英・英和ともに〈タコ〉と同様に扱われるが、〈イカ〉は見られない。先の『浪花聞書』以下の記述でも確認できるが、〈イカノボリ〉は「畿内」の言い方〈イカ〉の「本来の言い方・元々の言い方」などの語源意識が一般的であったことが知られる。[注16]

［32］項目4「まゆ」・23「りうきういも」・26「ぼうふら」の見出し語は、前項の3語に比べると近畿中央で早く衰退したためか、近畿地方には殆ど見られず、西日本各地に散在する。

またこれらより新しい京坂・近畿地方に固有な言い方が生じなかったためか、或いは勢力が弱かったためか、対応する現代共通語形の近畿地方への侵出が著しい。このため、［3］項に示した如く京阪でも現代共通語形の見られることがある。

［321］項目4「まゆ」

見出し語〈マユ〉は沖縄本島など、琉球では優勢であるが、それ以外にまとまった分布を持たない。富山・高知・熊本など、西日本の各県に数地点ずつ〈マイ〉〈マイゲ〉と混在するだけである。沖縄の分布がなければ、N類所属が妥当である。

西日本では紀伊半島を除く近畿から山陰及び鹿児島を除く九州に見られる〈マイゲ〉と紀伊半島・中国・四国の瀬戸内側に広がる〈マヒゲ〉が領域を二分する。

東日本では、関東南部を中心に甲信越にかけてマミアイ類（マミアイ・マミエ・マミヤなど）が混在する。[注17] このため、東北地方にまとまる〈コ(ー)ノケ〉の分布領域が目立つ。全国的にも領域の広さにおいて〈コ(ー)ノケ〉は〈マイゲ〉〈マヒゲ〉と競い合う。

なお、現代共通語形〈マユゲ〉（AB類・ab型）はまとまった分布領域を持たず、新潟・福島から大分・熊本まで他の変種（特に〈マイゲ〉）と混在する。

『物類称呼』では見出し語の使用地域は示されず、「関西にて・まゆげといふ　東国にて・まみあいといふ …」（29頁）という東西の違いが示される。見出し語〈マユ〉は、中古期の古辞書から『和英語林集成（初版・二版・三版）』まで調査資料ほぼすべてに見られる「規範形」とも言える言い方である。加えて『和玉篇』から見られる「関西」の言い方「まゆげ」を構成する言い方という意識も強かろう。

一方、「東国」の言い方である〈マミアイ〉は、〈マミエー〉〈マミエ〉を含めても『日本国語大辞典（二版）』で近世の文献（18世紀以降の咄本・洒落本・滑稽本など）が示されるだけで、『和英語林集成（初版・二版・三版）』にも殆ど見られない。[注18]〈マユ〉〈マユゲ〉と使い分けられる下位場面に一般的な言い方と判断できる。

見出し語〈マユ〉は、当時の京坂の言い方の語源となる言い方で、LAJにまとまった分布領域の見られない点で〈イカノボリ〉と共通するところがある。しかし、琉球に分布することからも歴史の深さは別格である。近世後期京坂・江戸ともにくつろいだ場面では一般的でなかろうが、書き言葉など上位場面では一定の勢力を持っていたと考えられる。[注19]

［322］項目23「りうきういも」

項目22「なんばんきび」同様室町末期に渡来した作物だけに古辞書類には殆ど用例が見られない。

しかし、分布状況は対照的で、方言量は少なく、分布は明快である。

見出し語〈リューキューイモ〉は音声変種を含めても、山口東部から島根・広島北部にまとまる程度で、あとは能登半島・淡路島・岡山・徳島・愛媛・福岡・長崎などに他の変種と混在する。

一方、現代共通語形〈サツマイモ〉（AB類・ab型）が東北から近畿・中国まで連続して広がる。このため、〈リューキューイモ〉がカライモ類・トーイモ類とともに島根・岡山・四国以西に押しやられている。

ただ、『物類称呼』に「畿内にて・りうきういもと云　東国にて・さつまいもといふ …」（80頁）と見え、当時はまだ見出し語が近畿地方で一定の勢力を有していたことが知られる。『解説4』は『近世上方語辞典』によって「文化・文政頃までは、上方ではリュウキュウイモと呼ぶのが普通であった … 近畿一帯にリュウキュウイモ類などがある程度広がっていた時期があり …」（49頁）とする。

従って、〈サツマイモ〉は今日最大の分布領域を持つが、それは19世紀後半以降江戸・関東地方を中心に急速に勢力を拡大して、近畿地方などに及んだ結果と判断される。

一方、江戸では、『はまおぎ（久留米）』に「とういも　（さつまいも　りうきういも」（9オ）の如く「関東のいやしき俗言」（凡例オ）に掲げられる一方、『椿説弓張月』の説明「琉球芋（りゆうきゆういも）（関東の俗は薩摩芋と称す。密初薩州に種を得たれば也。）」（前編・巻三　上・61頁）や『春色梅児誉美』四編・巻十二や『浮世床』初編・上などの表記「琉球芋（さつまいも）」などから〈サツマイモ〉に対する規範的な言い方であることが分かる（詳しくは山県一九九七　32章［512］項参照）。くつろいだ場面の〈サツマイモ〉に対し、上位場面で使われる言い方として〈リューキューイモ〉が江戸で一般的であったと判断される（『江戸語の辞典』には〈サツマイモ〉〈リューキューイモ〉とも用例が示される）。

［323］項目26「ぼうふら」

項目22「なんばんきび」・23「りうきういも」の見出し語と同じく、物としての歴史が浅い。このため、本項目の見出し語も古辞書類に殆ど用例が得られず、対応する現代共通語形〈カボチャ〉（AB類・a型）でも『和英語林集成（初版・二版・三版）』だけである。

分布状況は、項目22の状況に近く、西日本に様々な変種が分布する。

見出し語〈ボーフラ〉は鳥取・島根西部・広島・徳島・高知に限られる。連続していないが、各地域の分布密度は高い。清濁を異にする〈ボーブラ〉の分布領域はより広く、富山の一部・石川及び宮崎・鹿児島を除く九州の大半に見られる。また秋田には同系統の〈ドフラ〉〈ボンボラ〉などが分布する。

これはボーブラ類が近畿地方を中心とする〈ナンキン〉によって分断された結果である。しかし、〈ナンキン〉も東日本に広がり、最大の分布領域を持つ〈カボチャ〉に押され気味である。即ち、〈カボチャ〉は、三重・滋賀・京都・奈良など、近畿東半では圧倒的になり、山陰・鹿児島など西日本の周辺地域にも見られる。

文献などでその先後関係が確認できないが、分布状況からすると［ボーブラ類→カボチャ→ナンキン］という変遷が妥当であろう。このとき見出し語〈ボーフラ〉と〈ボーブラ〉の関係が問題となる。これらがポルトガル語「abóbara」を語源とするのであれば、〈ボーブラ〉が本来の

言い方で〈ボーフラ〉は変化形となる。文献でも18世紀半ばには京坂でこの変化の生じたことが確認できると言う（佐藤編一九八三　9巻・233頁）。この〈ボーフラ〉の新しさは先の分布状況からも首肯できる。

用例②の如く、見出し語は「西国」及び「江戸」の「先年」の言い方とされる。

② 南瓜　ぼうふら○西国にて・ぼうふら　備前にて・さつまゆふがほ　津国にて・なんきん　東上総にて・とうぐはん　大坂にて・なんきんうりヌぼうぶら　江戸にて先年は・ぼうふらといひ・今はかぼちゃと云　84頁

『解説4』は『近世上方語辞典』の「東鬧子」（一八〇三）によって京都〈カボチャ〉・大坂〈ナンキン〉・畿内〈ボーブラ〉という地域差の見られることを示す（58頁）。『物類称呼』の「大坂」はその一昔前の状態を示しているようである。従って、『物類称呼』当時京坂では〈ボーブラ〉が改まった場面に限られはじめていたかも知れない。

一方、関東・東日本に今日見出し語は存しないが、『物類称呼』の記述は江戸での〈ボーフラ〉の存在を示すと同時に〈カボチャ〉の勃興の兆しを示している。このことから旧形式である〈ボーフラ〉が上位場面、新形式である〈カボチャ〉が下位場面の如く使い分けられていたと予想される。また近世後期の関東・東日本各地で出された農書に〈ボーブラ〉〈ボーフラ〉が見られるとのことで、今日は伺えない広い分布のあったことが分かる（佐藤編一九八三　9巻・237～239頁）

ただ、19世紀に入ると江戸では『浪花聞書』「南京瓜（ナンキン）江戸でいふとうなす也小なるを江戸なんきんと云て賞翫す」（13頁）・『筑紫方言』「唐（たう）なす　ぼうぶら」（154頁）の如く〈トーナス〉が一般的になってきたようである。しかし、『はまおぎ（久留米）』「ぼうぶら（南瓜〈ホウブラ・右ルビ〉也かぼちや）」（6オ）の他、『和英語林集成（初版・二版・三版）』には〈カボチャ（番南瓜）〉〈トーナス（南瓜）〉とともに〈ボーブラ（南瓜）〉が見られる（英和の部「PUMPKIN」の項では、初版・二版〈カボチャ〉〈ボーブラ〉、三版〈カボチャ〉〈トーナス〉、一方「SQUASH」の項では、初版・二版〈トーナス〉、三版〈トーナス〉〈カボチャ〉である）。これらは規範的な言い方の一つとして〈ボーブラ〉が江戸である程度使われていたことを示す。『言海』においても〈ボーブラ〉は見出しに立てられるが、〈ボーフラ〉はその説明の中でさえ触れられていない。また、『大和本草』も「南瓜（ホウフラ）」（Ⅰ・161頁）で、見出し語〈ボーフラ〉は見られない。

小林隆氏による詳細な調査（佐藤編一九八三　9巻・232頁以下）によっても見出し語〈ボーフラ〉が〈ボーブラ〉とともに京坂・江戸で一定の勢力を有していたことは確認できる。しかし、〈ボーフラ〉と〈ボーブラ〉を比べると、近世後期以降の文献では〈ボーブラ〉の方が規範的な言い方とされていることが多いように思われる。

［4］A類という西日本に特徴的な見出し語7語につき、その分布類型の見直しを行い、近世後期の京坂・江戸及びそれらの周辺地域の実態についてまとめる。

歴史性の点でA類は対照的な二グループに分けられる。古い古辞書類から用例の見られるものと調査した古辞書類に殆ど用例の見出せないものである。後者は、文献に登場しにくい事物と言える項目35「いかのぼり」に加え、室町末期に渡来した植物である項目22「なんばんきび」・

23「りうきういも」・26「ぼうふら」で、本稿の調査資料からは当然の結果である。同じ由来の植物はAB類では項目24「たうがらし」だけで、後述のB類・N類には存しない。このため、新しい渡来系の植物名の多さはA類の特徴の一つとなる。

［41］西日本分布類として7語をまとめたが、西日本に限られつつ、その全域に分布するのは、項目6「きびす」の見出し語だけである。

一方、項目22「なんばんきび」の見出し語は東日本にも一部分布し、項目4「まゆ」・35「いかのぼり」の見出し語はまとまった分布が見られないなど、AB類やN類に近いものも存する。

なお、西日本でも九州・沖縄まで及ぶものは、項目4「まゆ」・6「きびす」・23「りうきういも」・35「いかのぼり」の見出し語である。項目29「たけ」の見出し語の如く特殊な事情を有するものも存するが、必ずしも古辞書類で確認できる歴史の深さと分布の広域性は一致しない。また全国的に見て最大の分布領域を持つものは、項目6「きびす」の見出し語だけである。

［42］A類の見出し語は、『物類称呼』の〈地域―方言形〉の記述で西日本の言い方として示されることが多い。

項目6「きびす」が「関西」、22「なんばんきび」・23「りうきういも」が「畿内」、26「ぼうふら」が「西国」（他に「先年の江戸」）の如くである。また項目4「まゆ」に基づく「まゆげ」が「関西」、項目35「いかのぼり」の省略形「いか」が「畿内」など、項目29「たけ」を除く6項目で、見出し語または関連する語形が西日本の言い方として示されている。『物類称呼』の記述で西日本の言い方とされる見出し語は、このようにA類の殆どを占めるが、AB類24語では項目16「とかけ」の見出し語（「畿内」の言い方）だけであった。

これらの見出し語に対して、項目4「まみあい」（東国）、6「かゝと」（関東）、22「たうもろこし」（東国）、23「さつまいも」（東国）、26「かぼちゃ」（今の江戸）、35「たこ」（関東）などの如く、同じく項目29を除いて、関東・東日本の言い方とされる方言形が示されている。従って、A類の見出し語が近世後期当時においても関東・東日本にまとまった分布領域を持っていたことは考えがたい。しかし、江戸の状況は周辺地域とは別だったようで、例えば、『物類称呼』の記述からでも〈ボーフラ〉が一時期江戸で使われていたことが分かる。その他、本稿で示した資料の限りでも〈ナンバンキビ〉を除けば『和英語林集成』を含め、何らかの形で用例が認められた。

またA類7語のうち〈マユ〉〈キビス〉〈タケ〉は中古期の古辞書から『和英語林集成』まで用例が見られた。この3語に限らずA類の見出し語は、江戸で使われる場合、歴史の深さを背景にして書き言葉など、上位場面では一般的であったようである。そこで、京坂の状態も併せて示すと、次の如く見出し語は多く上位場面の言い方として使われ、下位場面の言い方と共存していたと考えられる。

◇項目4「まゆ」

京坂＝マイゲ・マユゲ―マユ・マユゲ

江戸＝マミアイ・マミエ（ー）―マユ・マユゲ

◇項目6「きびす」

京坂＝キビス―キビス

江戸＝カカト―キビス

◇項目22「なんばんきび」

京坂＝ナンバンキビ・カシキビ―ナンバンキビ

江戸＝トーモロコシ―ナンバンキビ？

◇項目23「りうきういも」

京坂＝リューキューイモ―リューキューイモ

江戸＝サツマイモ―リューキューイモ

◇項目26「ぼうふら」

京坂＝カボチャ【京】・ナンキンウリ【大坂】・ボーブラ【大坂】―ボーブラ・ボーフラ

江戸＝カボチャ―ボーフラ

◇項目29「たけ」

京坂＝クサビラ―タケ・キノコ？

江戸＝キノコ―タケ・クサビラ

◇項目35「いかのぼり」

京坂＝イカ―イカノボリ

江戸＝タコ―イカノボリ

※　京坂・江戸ともに［下位場面の言い方―上位場面の言い方］の順で示す。

ただ、江戸でこれらの見出し語が使われる場合、『物類称呼』での対立的な示し方からも、その多くは上方臭とでも言うべき地域色を強く意識されていたと思われる。

［43］A類7語の見出し語の内〈キビス〉だけがa型で、他の6語はn型であった。

それに対して、近世後期京坂ではくつろいだ場面で項目22「なんばんきび」・23「りうきういも」の見出し語及び項目26「ぼうふら」の類似形〈ボーブラ〉が使われていた。また項目4「まゆ」・35「いかのぼり」の見出し語の変化形も同様に使われていた。

しかし、これらn型の見出し語は今日殆ど京坂に認められない。これは、東日本に広がる言い方が近世後期以降その領域を広げ、京阪に及んだためである。例えば、〈リューキューイモ〉に対する〈サツマイモ〉は今日完全に近畿地方全域に侵入し、〈ボーフラ〉〈ボーブラ〉に対する〈カボチャ〉や〈タケ〉に対する〈キノコ〉は京都にまで侵入している。また〈イカノボリ〉に対する〈タコ〉も近畿南部にかなり見られる。いずれも『物類称呼』で示された使用地域（江戸・関東・東国など）を拡大させており、全国的に見てもこの4語はLAJで最大の分布領域を持つ。

勿論、東日本に広がる言い方はすべて東日本に固有な言い方ではない。〈カボチャ〉〈キノコ〉〈タコ〉は西日本の周辺地域にも見られる。ただ、項目4「まゆ」を除く6項目において、その出自はともかく、江戸のくつろいだ場面で使われる言い方〈カカト〉〈トーモロコシ〉〈サツマイモ〉〈カボチャ〉〈キノコ〉〈タコ〉が近世後期以降江戸の発展とともにその領域を北へ西へと拡大したことは事実である。このとき、これらの言い方（A類＝Ⅱ類の見出し語に対応する現代共通語形）は、明治期には「標準語」として更に一層領域を拡大させたことは言うまでもない。

［44］以上明かな如くA類の見出し語7語の地域性・歴史性における共通性は《近世後期において一昔前から使われてきた京坂語であること》

とまとめられる。

「一昔前から使われてきた」という歴史性は、当時京坂での使われ方に二様あることを意味する。即ち、新しい言い方が生まれてきたため、見出し語が改まった場面の話し言葉や書き言葉に限られる場合（項目4「まゆ」・26「ぼうふら」・29「たけ」・35「いかのぼり」）と新しい言い方が生まれていないため、見出し語がくつろいだ場面の話し言葉に加え、改まった場面の話し言葉や書き言葉でも使われている場合（項目6「きびす」・22「なんばんきび」・23「りうきういも」）である。

このように京坂で改まった場面の話し言葉や書き言葉で使われる文体価値の高さが江戸でも同様の使われ方を生み、見出し語として選択されることになったと考えられる。

一方で「一昔前」でない、「更に昔の言い方」は避けられる。例えば、項目6「きびす」における〈クビス〉などは当時すでに話し言葉や日常的な書き言葉では使われなくなり、古語化・死語化していたようである。また、項目4「まゆ」の見出し語もそれに近いところがあったかもしれない。

［45］A類の見出し語は、7語すべてが現代共通語形と一致しないⅡ類である。

このため、対応する現代共通語形が『物類称呼』で見出し語に選ばれなかった理由が問題になる。

この点について本稿の限りで簡潔に言えば、京坂・江戸ともに、或いは江戸で見出し語が上位場面、現代共通語形が下位場面の如く使い分けられていたためとなろう。

以下、歴史性・地域性の点から見出し語と現代共通語形の違いを述べる。

［451］項目4「まゆ」・6「きびす」・29「たけ」については、見出し語の歴史の深さが際立っている。

更に〈マユゲ〉は「〈マユ〉の〈ケ〉」という構成が簡単に想起できるため、〈マユ〉に対して優位に立ち得なかったと考えられる。

項目35では分布状況から〈タコ〉の方が〈イカノボリ〉より古い言い方であると判断される。しかし、近世後期の文献の記述では〈イカノボリ〉が規範的な言い方と扱われることが多い。京坂の言い方〈イカ〉の原形という意識のためであろう。

その他、項目22「なんばんきび」・23「りうきういも」・26「ぼうふら」は室町末期からの植物故、歴史性の違いは云々しがたい。

［452］『物類称呼』の〈地域―方言形〉の記述によって使用地域の分かる現代共通語形は、〈カカト〉（関東）・〈トーモロコシ〉（東国）・〈サツマイモ〉（東国）・〈カボチャ〉（今の江戸）・〈タコ〉（関東）である。

その後、分布領域を急速に拡大させたことは既述の如くであるが、〈カカト〉〈トーモロコシ〉はLAJで関東地方またはその一部に限られている。近世後期では一層限られ、地域的な通用性の低さは吾山にも認識できていたかもしれない。

また〈カボチャ〉は『物類称呼』の記述の如く先年の言い方〈ボーフラ〉に対する今の言い方である。当時江戸及びその周辺地域ではまだ十分な広がりを有していなかったと考えられる。

［453］注(11)に記した如く、本稿の調査結果の限りで別の言い方が見出し語に対して共通語的性格で劣っていることを積極的に示すことは難しい。

実際、以上述べてきた如く本稿で検討した歴史性・地域性から考えると、特に〈サツマイモ〉〈タコ〉は〈リューキューイモ〉〈イカノボリ〉に対して共通語的性格で特別劣っていたとは言いがたい。

本稿では文献から読みとれる文体価値の高さに基づいて〈リューキューイモ〉〈イカノボリ〉が見出し語として選択されたと考えた。しかし、それは〈サツマイモ〉〈タコ〉が選択されなかったことを示した上のものでないため、万全なものではない。

43・東日本分布類（B類）

［1］江戸で刊行された『物類称呼』であるが、東日本分布類の見出し語は4語で、本稿で対象とした見出し語の一割を占めるに過ぎない。

そのうち、東京に分布するb型は項目5「くろぶし」・31「かゝし」・34「すりこぎ」の見出し語で、京阪・東京ともに分布しないn型は項目19「かはづ」の見出し語である。

［11］A類の見出し語とは異なった形でB類の見出し語にも問題が存する。

例えば、これらは東日本に固有な言い方であるのか、京坂出自の言い方ながら西日本で衰退したため、このような分布になったのではないか。一方、これらに対して西日本に分布するのは、どのような言い方で、京坂ではどのように使われているのか。更に近世後期ではB類の見出し語及び対応する西日本の言い方はどのように分布し、京坂・江戸でどのように使われていたのか等々。

また項目31「かゝし」・34「すりこぎ」の見出し語はⅠ類、項目5「くろぶし」・19「かはづ」の見出し語はⅡ類である。このため、後者では対応する現代共通語形について同様の観点から考察する必要がある。

［12］歴史性の点でB類の見出し語は、AB類・A類の見出し語と異なり、特徴①〈和名抄などの用例〉の見られないことを特徴とする。

このため、特徴②〈用例の非存在〉を示す項目5「くろぶし」・31「かゝし」と室町期の古辞書類から『和英語林集成』まで用例の見られる項目19「かはづ」・34「すりこぎ」に二分される。

ただ、前者に特徴②が見られるとは言え、A類の項目23「りうきういも」・26「ぼうふら」とは別に考えなければならない。

［2］B類・b型の3語で関東地方を含む広い地域に分布するのは、項目31「かゝし」の見出し語で、それに項目34「すりこぎ」の見出し語が続く。

項目5「くろぶし」の見出し語は東京近辺に見られはするが、まとまった分布領域を持たない。

［21］項目5「くろぶし」

LAJの後期計画で新たに加えられた項目であるため、調査地点数が少なく、見出し語〈クロブシ〉は東京の1地点での使用に基づき、b型と判断した。

全国的な分布は、福島西部・埼玉南端にややまとまった領域が存するだけで、秋田・岩手・山形・群馬・千葉・神奈川・新潟・石川・静岡・

愛知・岐阜など、本稿で「東日本」とする各県に2・3地点ずつ見られる。

同系統で、現代共通語形の〈クルブシ〉（B類・n型）も新潟・福井・岐阜・滋賀などに若干まとまる程度である。むしろ、東日本では長野・山梨・群馬などの〈クルミ〉、福島・栃木・茨城の〈キビス〉、東北の〈クロコブシ〉〈クロコボシ〉の方がまとまっている。

西日本では近畿中央の〈ウメボシ〉、中四国・九州西半の〈トリノコフシ〉がまとまった分布を見せる。

右の如くこの項目では全国的に見て圧倒的な分布領域を持つ変種は存しない。

『物類称呼』では類似形の〈クロコブシ〉を「三河」の言い方として示すだけで、見出し語や近畿の〈ウメボシ〉に関する記述はない。

見出し語は古辞書類に全く用例が見られない。『和英語林集成（初版・二版・三版）』でも〈クロブシ〉は見られず、英和の部「ANKLE」の項に現代共通語形〈クルブシ〉が示される。この〈クルブシ〉は先の如く分布領域は狭いが、『和玉篇』『日葡辞書』などから見られる伝統のある言い方で、『和英語林集成（初版・二版・三版）』『言海』でともに見出しに立てられている（『言海』に〈クロブシ〉は見えず、訛語として〈クロボシ〉を示す）。

勿論、見出し語〈クロブシ〉は江戸でも一定の勢力はあったようで、『日本国語大辞典（二版）』『江戸語の辞典』には俳諧や洒落本の用例が示され、後者は「『くるぶし』の訛。更に訛って『くろぼし』とも。」と記す。また『浜荻（仙台）』「くろこぶし　…　くろぶし」（381頁）・『はまおぎ（久留米）』「とりこのふし　（くろぶし）」（8ウ）の如く各地の方言形に対照してある。広く文献を検討された小林隆氏は「近世後半、江戸庶民の口頭語として広く使用されていた語形ではないか」（小林二〇〇四　227頁）とされる。

以上、江戸では伝統的な言い方である〈クルブシ〉が上位場面、見出し語〈クロブシ〉が下位場面の如く使い分けられていたと考えられる。

一方、京坂では『日本国語大辞典（二版）』の用例からまだ〈ウメボシ〉は生まれていなかったかもしれない。伝統的な言い方である〈クルブシ〉はLAJで〈ウメボシ〉の東側（福井・滋賀東半・岐阜）にまとまり、それ以外に京都北部・兵庫・三重にも点在する。このことから当時はまだくつろいだ場面でも普通に使われていたと考えられる。

［22］項目31「かゝし」

概ね新潟・富山・岐阜・愛知・静岡富士川以西に〈カガシ〉〈オドシ〉、これら以外の東北・関東・中部（長野・山梨）に見出し語〈カカシ〉が広がり、見事な東西対立を見せる。

『物類称呼』でも「西国にて・鳥をどし」とした上で「関西より北越辺かゞしといふ　関東にてかゝしとすみていふ」（111頁）と割注を施す。ただ、見出し語は古辞書類に見られず、『日葡辞書』『和英語林集成（初版・二版・三版）』とも〈カガシ〉を示すだけである。

〈カカシ〉と〈カガシ〉の先後関係について『解説4』では「近畿で新しく広がったもの（＝〈カガシ〉・筆者注）が、東へ伝播してこれだけの分布を得たと考えるよりは、東に広大な領域を占めるもの（＝〈カカシ〉・同）が近畿にも波及しオドシの分布のすきまに侵入したとする

考えのほうが自然であろうか」（85頁）としてある。一考に値するが、もしそうであれば、その「侵入した」時期は18世紀後半よりかなり前のことであろう。

西日本の言い方である〈カガシ〉は、一定の分布領域を持ち、『和英語林集成』で見出しに立てられている。このため、江戸・東京でも一定の文体価値を有し、使われていたことが知られる。或いは、〈カガシ〉が上位場面の言い方、〈カカシ〉が下位場面の言い方として使い分けられていたかも知れない。しかし、江戸の言い方である〈カカシ〉も分布領域の点で見劣りしない上、時代は下るが、『言海』で見出しにされている（一方、〈カガシ〉に関する記述はない）。

［23］項目34「すりこぎ」

見出し語〈スリコギ〉の専用地域は中部地方に限られるが、音声変種を含めると、福井・岐阜・愛知以東の東日本ほぼ全域と九州南西部・奄美・沖縄本島に分布する。

〈クロブシ〉〈カカシ〉と異なり、東日本に限られないが、東西の分布領域のアンバランスのためB類とした。

一方、西日本は、近畿中央に〈レンゲ〉がまとまり、それを取り巻くように〈レンギ〉〈デンギ〉などが紀伊半島東岸・近畿北部から中四国・九州北西部に広がる。

『物類称呼』でも「江戸にて・すりこぎ　五畿内及西国中国四国にて・れんぎと云 …」（115頁）の如くほぼ現代方言と同様の分布が捉えられている。また『浮世風呂』四―中の「かみがた下りの男（けち兵衛）」のことばに「雷槌（れんぎ）」（255頁）が見られるなど、この意味項目における京坂と江戸の言い方の違いが周知のことであったことが分かる。

ただ、その周圏的な分布から〈スリコギ〉は〈レンギ〉より以前の近畿地方の言い方で、『解説4』も「レンギ・レンゲの類は、分布から見て歴史的にかなり新しい時代に近畿から西へ広がったもの」（19頁）と記す。

ちなみに、〈スリコギ〉は古辞書類の用例で室町期のものから、『日本国大辞典（二版）』で12世紀からの文献を示す。一方、〈レンギ〉は『日本国語大辞典（二版）』で「かた言」（一六五〇）以降の文献に見られるなど、その先後関係は確認できる。

また『仙台言葉以呂波寄』「まわし　すりこ木の事」（41頁）・『燈心野語』「めぐりこぎ　すりこぎの事」（84頁）の如く京都出身者が仙台方言を取りまとめた方言書では、方言形に対して〈スリコギ〉が示されている。いずれも『物類称呼』より少し前の18世紀前半の成立で、『日本国語大辞典（二版）』の用例からはすでに〈レンギ〉が一般化している時期の文献である。これらに〈スリコギ〉が見られるのは両書では方言形に対して一般的に「改まった場面や書き言葉で使われる言い方」が対比・対照してあるためである（山県二〇〇一）。

以上、京坂では当時くつろいだ場面では〈レンギ〉、改まった場面などでは〈スリコギ〉が使われていたことは明かであろう。また江戸でもくつろいだ場面と同時に上位場面でも〈スリコギ〉は使われていたと考えられる。

［3］京阪・東京に見られない項目19「かはづ」の見出し語は、九州を除く各地に点在するが、まとまっているのは長野・愛知・静岡西端であ

る。

類型化に際して新潟・岐阜・愛知以東を「東日本」とした結果、このような分布地域の〈カワズ〉はB類に分類されることとなった。

全国的な分布では、現代共通語形〈カエル〉（AB類・ab型）がいろいろな変種と混在しながら東北南部・関東・中部の大半・近畿・中四国まで連続し、最大の分布領域を持つ。

確例はともに中古期から見られるが、古辞書類での現れ方は〈カエル〉の方が一般的である。山県一九九七でも述べたが（32章［72］項参照）、〈カワズ〉が当時の京坂・江戸でくつろいだ場面で普通に使われていたとは考えにくい。

このとき、〈カエル〉も中古期の古辞書から見られる伝統的な言い方であり、くつろいだ場面だけでなく、改まった場面などでも使われていたと考えられる。そのような使われ方を背景とする〈カワズ〉と〈カエル〉の文体価値の微妙さが「蝦蟆　かはづ　かへる」という見出し形式に現れている。[注20]

実際、くつろいだ場面の言い方としては節用集で〈カエル〉に変わって見られる〈カイル〉が一般的であったと考えられる。[注21]このため、当時の京坂・江戸において〈カワズ〉が〈カエル〉に対して共通語的性格を有する言い方として圧倒的に優位であったとは考えがたい。

結局、〈カワズ〉が見出し語とされたのは、社会的な実態の反映ではなく、例えば、『日葡辞書』の「詩歌語」の注記や『言海』「かはづ」の項「詩歌ニ詠ズルモノハ、汎（ヒロ）クかへるノ類ノ称。」の記述の如く、歌語・雅語意識が吾山及び社会一般に存したためではなかろうか。

［4］LAJにおいて東日本に特徴的に分布するB類の見出し語4語につき、その分布類型の見直しを行い、近世後期の実態や共通性などまとめる。

ただ、AB類・A類に比べて所属語が4語と少ない上、歴史性・地域性で二分される。このため、現代方言での分布状況以外ではB類に共通する性格が捉えにくい。

［41］東日本分布類としたが、歴史的に見て東日本に固有な言い方、即ち、東日本出自の言い方は、項目5「くろぶし」・31「かゝし」の見出し語だけである。

一方、項目34「すりこぎ」の見出し語は京阪を中心に分布する〈レンギ〉の一昔前の言い方で、九州から沖縄にかけても分布し、AB類に近い。

また項目19「かはづ」の見出し語は中部地方にまとまった分布地域を持つ。B類で問題はないが、項目5・31の見出し語とは異なるタイプである。

［411］東日本出自の〈クロブシ〉〈カカシ〉は、本稿で言う「東日本」にほぼ納まる。

近世後期でも江戸及びその周辺地域でくつろいだ場面の言い方としてよく使われていたと考えられる。

一方、語形の上で類似した〈クルブシ〉〈カガシ〉は室町期の文献から見られる言い方で、中部地方や西日本に一定の分布領域を有する。江戸では改まった場面で使われ、〈クロブシ〉〈カカシ〉と使い分けられていた可能性がある。

AB類・A類ではこのような江戸のくつろいだ場面で使われる言い方は見出し語として避けられていた。その点で項目5「くろぶし」・31「か

ゝし」の見出し語は例外的な存在である。

ただ、分布領域の点で〈カカシ〉は西日本の〈カガシ〉と国土をほぼ二分する広さを持つ。しかし、〈クロブシ〉はN類的な分布状況である。更に〈クルブシ〉の「訛り」という意識が伴い、文体価値の低さは〈カカシ〉の比ではなかろう。共通するところもあるが、〈クロブシ〉と〈カカシ〉を同列に扱うことは出来ない。

［412］〈スリコギ〉はB類・b型としたが、AB類・b型に近く、全国的にも最大の分布領域を有する。

西日本に広がる〈レンギ〉の一昔前の言い方で、江戸ではくつろいだ場面と同時に改まった場面でも使われていたと考えられる。一方、「五畿内及西国中国四国」の言い方である〈レンギ〉は、当時京坂のくつろいだ場面で一般的な言い方で上方臭と言える地域色は強かったであろう。

また、B類・n型とした〈カワズ〉は、近世後期京坂・江戸ともにくつろいだ場面で一般的でなかったと考えられる。ただ、対応する現代共通語形〈カエル〉も同程度の歴史性を有し、場面性（文体性）の点で〈カワズ〉と重なるところは少なくない。より下位場面の言い方として古辞書類に見られる〈カイル〉が存し、〈カワズ〉〈カエル〉と使い分けられていたと考えられる。

［42］B類の見出し語は、地域性・歴史性の点で、《近世後期において最新の江戸語であること》という性格を持つものと《近世後期において一昔前の京坂語であること》という性格を持つものに二分される。

後者は、項目19「かはづ」・34「すりこぎ」の見出し語で、AB類・A類でも認められた性格である。この場合、より新しい言い方である〈カイル〉〈レンギ〉があるが、これらとは場面（文体）的に使い分けられている。

一方、前者は、項目5「くろぶし」・31「かゝし」の見出し語で、「江戸」という地域性と「最新の」という歴史性の2点で、AB類・A類に見られない性格となる。ともに「動物」「生植」の項目でないためであろうか。

ただ、項目31「かゝし」では〈カカシ〉と〈カガシ〉の違いが本稿の限りでは明らかでない。このため、場面性（文体性）に不確かなところが多く、このような性格を持ちながら見出し語として選択されたことの妥当性は説明できない。

しかし、項目5「くろぶし」では、伝統的な京坂の言い方である〈クルブシ〉が存する。そのような〈一昔前の京坂語〉がありながら、それからの「訛り」である〈クロブシ〉が見出し語として選択されたことに関しては疑問が少なくない。[注22]

［43］東日本分布類4語のうち現代共通語形と一致しないⅡ類は、項目5「くろぶし」・19「かはづ」の見出し語である。

繰り返し述べてきたが、対応する現代共通語形〈クルブシ〉〈カエル〉はこれらの見出し語に対して共通語的性格の点で劣っていたとは考えがたい。

〈カワズ〉と〈カエル〉の違いは、本稿で検討してきた共通語的性格の限りでは殆どないと言える。最終的には〈カワズ〉に対する歌語・雅語意識を決め手にした。しかし、これは〈カエル〉が見出し語として選択されなかった積極的な理由とは言えない。

〈クロブシ〉と〈クルブシ〉の場合は問題が大きい。歴史性や場面性（文体性）の点では〈クルブシ〉の方が〈クロブシ〉より優位にあると判断される。この点でも注㉑に述べた如く誤記の可能性を考えておくべきかも知れない。

44・無分布類（N類）

［1］無分布類は項目9「うごろもち」の見出し語だけである。

これは京阪・東京にも分布しないn型で、現代共通語形と一致しないⅡ類でもある。今回対象とした見出し語36語の中でも例外性が高い。

［2］見出し語〈ウゴロモチ〉はLAJで奈良南部に1地点（吉野郡上北山村大字西原）しか見られない。

ちなみに『日本方言大辞典』でも〈ウゴロモチ〉については『物類称呼』の例を示すだけである。

しかし、〈ウゴロモチ〉が孤立している訳ではない。京阪及びその周辺地域には〈オンゴロ(モチ)〉〈ウンゴロ(モチ)〉など、類似形が分布し、近畿南半や四国に一定の領域を持つ。

『物類称呼』の記述は用例③の如くで、見出し語は「京」の言い方とされ、今日と同じく近畿各地や四国の言い方として類似形が示される。

③ 鼴鼠　うごろもち〇京にて・うごろもち　東武にて・むぐらもち　西国にて・もぐら　中国にて・むぐろもち　四国にて・をごらもち　遠江ニて・いぐらもち　大和及伊賀伊勢にて・をごろもち　越後にて・土龍（どりう）といふ　35頁

〈ウゴロモチ〉の用例は、古辞書類で『和名抄』と『和英語林集成（三版）』だけである。しかし、『日本国語大辞典（二版）』では「本草和名」（九一八頃）・「温故知新書」（一四八四）の他に俳諧「両吟一日千句」（一六七九）・「好色二代男」（一六八四）の用例が示されるなど、一定の勢力が認められる。

中古から近代に至るまでの【土竜】の言い方については前田一九六九・七〇が詳しい。近世の状態については「ウグロモチが普通語であり、ウゴロモチも、いくらか文語的な性格を持っていたかもしれないが、使われており、ムグラモチの系統の語は江戸などで使われ、… 近世中期からはごくあたりまえの語として、ウグロモチにかわって使われるようになった」（前田一九八五　384頁）とまとめられる。確かに『浪花聞書』「うくろもち（土龍也　江戸でもくらもちといふ）」（14頁）もそのような京坂語の一端を示している。従って、『物類称呼』は見出し語を「京」の言い方とするが、「実際にはかなりウグロモチが使われていた」（前田一九八五　393頁）のであろう。

確かに『和英語林集成（三版）』和英の部で〈ウゴロモチ〉は見出しに立てられるが、英和の部「MOLE」の項では、初版・二版・三版とも〈ムグラモチ〉〈ホクロ〉〈ドリュー〉を示すだけである。また『言海』でも〈ウゴロモチ〉は見出し語とされるが、「〻」印（＝「古キ語、或ハ、多ク用ヰヌ語…」）を付して、「むぐらもちニ同ジ。」と記す。

従って、近世後期京坂で〈ウゴロモチ〉は下位場面の言い方である〈ウグロモチ〉に対して使い分けられる上位場面の言い方であったと考えられる。この点で見出し語〈ウゴロモチ〉は《一昔前の京坂語である

こと》という性格は持つ。

ちなみに、〈ウグロモチ〉は『大和本草』に「鼷鼠（ウクロモチ）」（Ⅱ・263頁）と記される上、本文中にも見られるが、〈ウゴロモチ〉については触れられていない。また〈ウグロモチ〉は『名義抄』を初めとして多くの古辞書類に見られる言い方である。しかし、このように『物類称呼』で〈ウゴロモチ〉が選択されていることは、その独自性を示す例として無視できない。

なお、見出し語として選択されたのは、右の如き文体価値に加えて、吾山が「凡例」に示し、本文でも盛んに引用している『和名抄』に用例が見られる、伝統的な言い方である点も無視できない。

［3］全国的には現代共通語形〈モグラ〉（AB類・b型）が関東全域からその隣接地域及び大分・宮崎を除く九州に分布し、最も広い領域を有す。

しかし、LAJでの分布にもかかわらず用例③の如く『物類称呼』では「西国」の言い方とされるだけ、吾山のお膝元である関東地方では〈ムグラモチ〉を「東武」の言い方として示すだけである。

確かに『和英語林集成（初版・二版・三版）』に〈モグラ〉は見られるが、「MOGURA, モグラ, see Mugura」の如き〈ムグラ〉主体の示し方で、既述の如く和英の部には見られない。ほぼ同時期の『東京京阪言語違』でも「もぐらもち　おんごろもち」（379頁）の如く「東京ことば」に〈モグラ〉は見えず、「上方ことば」はLAJで近畿中央に見られる見出し語の類似形が示される。『言海』でも〈モグラ〉は見出しとされず、〈モグラモチ〉も示されるが、「むぐらもちノ條ヲ見ヨ。」と記される。

東日本の〈モグラ〉は、「東武」の言い方とされる〈ムグラモチ〉の次に一般化した〈モグラモチ〉から派生した最も新しい言い方であろう。前田氏のように18世紀後半江戸では〈ムグラモチ〉或いは〈モグラモチ〉が一般的であったようである。[注23] このように当時まだ江戸・関東地方では〈モグラ〉が殆ど使われていなかったと考えられる。

［4］前稿で〈ウゴロモチ〉をN類とし、ここまで議論を進めてきたが、既述の如く類似形が少なくない。

例えば、「①一・二・三音節目の子音・母音の違いは《訛り》として許容する、②〈～モチ〉という後部成素の存在は重視する」と言う原則を立てて類似形を同系統としてまとめ、ウゴロモチ類を考えると、青森から鹿児島まで分布するAB類と言える。[注24]

『解説5』では〈ウゴロモチ〉が特徴①〈和名抄などの用例〉を持つ歴史の深い言い方でありながら、分布は奈良県南部のみである点を「文献でたどれる最古のものが、近畿周辺にしか見られない」と表現し、「文献による語史の研究と言語地理学による語史の研究とが、うまくかみ合っていない」（35頁）例として問題にしている。

しかし、「近畿周辺」とされる1地点も地勢的には周辺地域と言える山間地である。また右の如く類似形をまとめると、その分布領域は最大となる。そこで、このような巨視的な捉え方をすると、3章［41］項で述べた如く本項目においても見出し語に広く認められる地域性と歴史性の関連のあり方、即ち、分布領域が広く、京坂での歴史が深いということが認められることになる。

5．おわりに

［1］本稿は、『物類称呼』の見出し語がくつろいだ場面の言い方としてどの地域で使われるかを考察するものの一つである。

前稿では、36項目の見出し語のLAJでの分布状況を四つの分布類型に分類して検討した。しかし、《出来るだけ多くの見出し語を同一基準で扱い、その地域性の大凡の性格を把握する》にしてもやや詳細を欠いていた。このため、本稿では見出し語ごとに分布状況を検討し、その地域性を捉えなおすことを第一の目的とした。その上で近世後期のくつろいだ場面の言い方としてどの地域で使われたかを考察した。

次に、これらを踏まえ、見出し語が近世後期の京坂・江戸においてどのような性格であったかを明らかにすることを第二の目的とした。また可能な項目については、該当の言い方が『物類称呼』の見出し語として選択されたことの妥当性や意味に言及した。

ただ、この点に関しては、今後調査・検討を行うべき事項の多いことが明らかになった。

［2］分布類型の見直しは、東西日本の分布類型の連続性を示す形で行った。

具体的には「東西分布」「西日本分布」「東日本分布」「無分布」という類型で、それぞれ典型的な分布の見出し語、周辺的で、他の類型に近い分布の見出し語を明らかにした。

［21］東西分布類AB類は、東日本の分布領域と西日本の分布領域がほぼ等しいこと、即ち、東日本と西日本の分布領域のバランスを認定の基準とした。

典型的なAB類は、ab型・(71)の2語（項目7「むま」・21「こめ」の見出し語）と(72)の5語（項目1「にじ」・3「ぢしん」・8「うし」・17「とんばう」・33「すりばち」の見出し語）で、全国的に見出し語の分布領域が最も広い。

一方、西日本分布類A類に近いものは、項目16「とかけ」・27「じうやく」の見出し語である。特に後者は京坂から江戸へ飛火をし、周辺地域に広がった言い方である。このため、近畿の分布と関東の分布は連続しない。項目24「たうがらし」の見出し語も同じく飛火で伝播したものであるが、東日本に一定の分布領域を持っている。

東日本分布類B類に近いものは、項目11「せきれい」の見出し語である。このため、ab型であるが、京阪での勢力は弱い。無分布類N類に近いものは、項目25「つく〳〵し」の見出し語である。分布密度は低く、連続した分布を持たないが、東北（宮城・山形）から九州（大分・熊本・長崎）まで広がるなど、分布の広域性はある。

［22］西日本分布類A類・東日本分布類B類は、西日本・東日本に特徴的に分布するものである。

西日本或いは東日本に固有な言い方と言える、典型的なA類・B類の分布を示すものは、A類で項目6「きびす」の見出し語、B類で項目31「かゝし」の見出し語である。前者は、本稿で言う東西の境界線以西に連続して広がるが、後者は岐阜・愛知・静岡西部に分布せず、東日本に固有ではあるが、分布領域は東に偏る。

しかし、A類でも東日本に分布し、B類でも西日本に分布するものが

ある。項目22「なんばんきび」・35「いかのぼり」の見出し語は、A類でもN類に近い。また前者は静岡・愛知にも見られ、AB類的なところもある。

B類では項目34「すりこぎ」の見出し語が京坂の一昔前の言い方として、東日本の広い分布領域の他に西日本にも見られる。しかし、西日本の分布は狭く、AB類の項目16「とかけ」・27「じうやく」の見出し語に比べると東西のバランスを欠く。

無分布類N類は項目9「うごろもち」だけで、LAJではその使用地点が1地点と典型的な様相を示す。

［23］『物類称呼』の見出し語は、基本的に室町期以前から京都で使われていた言い方で、元々はその歴史の深さを背景に全国または西日本に広がったAB類かA類である。

その後AB類の見出し語の一部に西日本で衰退したものがあったため、B類という東日本に特徴的な分布を取るものが生まれた。しかし、例外的に東日本に固有な言い方が存する。B類4語のうち項目5「くろぶし」・31「かゝし」の見出し語が該当しよう。ただ、この2語も類似形の〈クルブシ〉〈カガシ〉は京都でも見られるため、厳密には東日本出自の言い方と言えないかも知れない。

以上、前稿でも述べたように『物類称呼』の見出し語は《西日本にやや傾くが、日本の東西に広く分布する言い方を基本とする》ということが本稿でも確認できる。

ただ、本稿では歴史性を検討したため、LAJだけでは知り得ない分布の背景が示し得た。このため、東日本に固有でない言い方がB類にも存することが分かり、見出し語全体では西日本色が強まった。

反面、N類以外にN類的な分布密度の低い言い方も少なからず存することが分かった。しかし、それらも東北から九州まで広く散在する広域性が認められたり、類似形をまとめると広く連続した分布が現れたりするなど、見出し語と同一の方言形に基づいた分布類型では論じられない面も見えてきた。

［3］歴史的に遡って『物類称呼』の見出し語36語の近世後期の地域性を検討したが、LAJの分布と大きな違いはないようである。

勿論、本稿で扱った資料では当時の全国的な分布状況は捉えることができない。そこで、京阪・東京の分布類型に基づき、近世後期の京坂・江戸及びそれらの周辺地域に限定して考察した。

例えば、LAJで京阪・東京いずれも分布するab型は、近世後期には京坂だけのa型、江戸だけのb型、京坂・江戸いずれにも分布しないn型、いずれかであった可能性が考えられる。

このように見出し語が分布領域を拡大させる一方、京阪に分布するa型が、近世後期に京坂・江戸いずれにも分布するab型であった可能性、即ち、分布領域を縮小させていることも考えられる。

更にこのような分布領域の拡大・縮小が周辺地域に広がっていけば、東西日本の分布類型に及ぶことも予想される。

［31］東西分布類AB類の24語のうち、近世後期から今日まで京阪・東京において変化の見られるものは、いずれもab型の項目27「じうやく」・28「すみれ」・33「すりばち」である。

項目27「じうやく」は、LAJで東京23区内は〈ジューヤク〉と〈ドクダ

ミ〉が併用され、都下は〈ジューヤク〉だけである。しかし、近世後期の江戸の文献に見出し語〈ジューヤク〉は見出しがたく、『物類称呼』『常陸方言』で江戸の言い方としては「どくだみ」が示される。いつ頃京坂から飛火したか不明であるが、当時江戸のくつろいだ場面への浸透は不十分であったと考えられる。ただ、当時ab型でなくa型であったとの確証はない。しかし、江戸の周辺地域への広がりは限られていたと想像される。このため、近世後期にはAB類でなくA類とするのが妥当であろう。

項目28「すみれ」では、『物類称呼』に畿内の言い方として「すまふとりぐさ」が示され、方言書類にも記される。近世後期京坂のくつろいだ場面では〈スミレ〉ではなく〈スモートリグサ〉が一般的で、当時はab型でなくb型であったと考えられる。

項目33「すりばち」は、『物類称呼』で大坂の言い方として「すりこばち」が示され、LAJでも大阪南端・和歌山に〈スリコバチ〉が見られる。このため、近世後期大坂でくつろいだ場面の言い方として使われていた可能性がある。

この二つの項目は、近世後期以降見出し語が大坂または京坂に侵入してきた例となる。

［32］西日本分布類A類で近世後期から今日まで京阪・東京において変化の存したものは、項目22「なんばんきび」・23「りうきういも」の見出し語である。

いずれの見出し語もn型であるが、『物類称呼』ではともに「畿内」の言い方とされる。その他の文献でも確認でき、当時京坂のくつろいだ場面で〈ナンバンキビ〉〈リューキューイモ〉が使われていたことは間違い。ただ、項目22の場合、京で〈ナンバ〉、大坂で〈ナンバキビ〉が使われはじめ、〈ナンバンキビ〉と使い分けられていた可能性も考えられる。

同じくn型の項目26「ぼうふら」は、江戸の先年の言い方として見出し語が示されるが、『物類称呼』当時のくつろいだ場面での使用を示すものでないため、類型に変更はない。

なお、東日本分布類B類には今日まで京阪・東京で分布に変化の生じた見出し語は存しない。

［33］無分布類N類唯一の項目9「うごろもち」の見出し語は、『物類称呼』で京の言い方とされていた。

ただ、当時の文献の状態を考えると、くつろいだ場面で使われていたとは考えがたい。話し言葉で使われる場合も改まった場面に限られ、更に書き言葉だけに限られていたかもしれない。このため、くつろいだ場面での使われ方を考えると、『物類称呼』の記述に関わりなく、近世後期でもn型としておくべきであろう。もう少し時間の幅を取れば、先の江戸の〈ボーフラ〉と同じく京・江戸において衰退した例として扱えたかもしれない。

［34］項目によって調査の密度に差があり、すべての項目が同レベルで検討できた訳でない。

しかし、京坂・江戸及びそれらの周辺地域で近世後期以降使われなくなった言い方は、大坂で33〈スリコバチ〉、京坂で22〈ナンバンキビ〉・23〈リューキューイモ〉・28〈スモートリグサ〉、逆にその後勢力を

得てきた言い方は、江戸で27〈ジューヤク〉となる。

これらの代わりに使われるようになった言い方は、順に33〈スリバチ〉・22〈トーモロコシ〉・23〈サツマイモ〉・28〈スミレ〉、勢力を失った言い方は、27〈ドクダミ〉である。

見出し語・現代共通語形が入り乱れているが、京坂で使われるようになった言い方がすべて現代共通語形であることは当然の結果かも知れない。一方、江戸での〈ドクダミ〉から〈ジューヤク〉への交替は、ここでは例外的な存在となる。まだ京坂語の権威が強かったことを示す例になろうか。

［35］近世後期から今日までの京阪・東京での変化で東西日本の分布類型の枠組にまで及んだものは、項目27「じうやく」だけであった。

しかし、他に確認できなかっただけで、その可能性のある項目は少なくない。

A類の項目26「ぼうふら」の見出し語は、江戸の先年の言い方で、小林氏の調査でも近世後期の東日本各地の農書に見られた。〈ボーフラ〉か〈ボーブラ〉か定めがたい例もあるが、ボーブラ類として一括すると、当時AB類と認められる広がりを有していたと考えられる。

項目34「すりこぎ」の見出し語は、B類ながら九州にも分布が見られる。200年内外のうちに〈レンギ〉が九州で大幅に領域を拡大したのであれば、近世後期当時〈スリコギ〉の領域は今日より広かったかも知れない。この場合はAB類に所属させられよう。

いずれも［2］項でA類・B類の中で周辺的な分布を示すものとして示した。今後地方語文献の調査を進めていけば、これら以外にも変化の生じた項目が確認できよう。

［4］近世後期の京坂・江戸の分布状況とLAJでの京阪・東京の分布状況で変化の確認できたのは、4項目に過ぎなかった。

それも見出し語の使用については、拡大・縮小両方が見られるため、京坂・江戸いずれでも使われるab型の割合はLAJに依るものと殆ど変わらない。

このため、くつろいだ場面では京坂或いは江戸だけで使われる、またはいずれでも使われない見出し語が過半数を占めることも変わらない。しかし、改まった場面の話し言葉や書き言葉で使われる場合まで考えると、京坂・江戸いずれでも使われていた見出し語が多くなる。これは、くつろいだ場面だけでなく改まった場面や書き言葉でも使われる言い方や改まった場面や書き言葉だけで使われる言い方が見出し語に少なくないためである。

逆にくつろいだ場面の話し言葉だけで使われるような文体価値の低い言い方は、項目5〈クロブシ〉・27〈ジューヤク〉だけで、江戸で〈クルブシ〉〈ドクダミ〉と使い分けられていた。その他、項目31「かゝし」で西日本に広がる〈カガシ〉と使い分けられていたのであれば、江戸で〈カカシ〉がくつろいだ場面に限られていた可能性も出てくる。

その他、項目16〈トカケ〉は京坂のくつろいだ場面の言い方であるが、現時点では京坂・江戸ともに上位場面で使われていた可能性が否定できない。項目31「かゝし」の場合と同様、今後調査が必要である。

このようにくつろいだ場面に限られる言い方が少ないことから、見出し語が近世後期に京坂・江戸でどのような性格であったかは自ずと明か

であろう。

以上の如き見出し語の文体価値の高さは、結局『物類称呼』の見出し語が基本的に近世後期当時一昔前から使われてきた京坂語であるためと言えよう。

これは、各分布類型のまとめで示したが、同じ意味項目に京坂・江戸のくつろいだ場面で使われる、より新しい言い方がある場合、それを避ける傾向が顕著であること、一方話し言葉では使われなくなった、死語化・廃語化したような言い方がある場合、それを避ける傾向が見られることからも明かであろう。

しかし、「改まった場面の話し言葉や書き言葉に限られる」とした見出し語には、話し言葉では使われない、死語化・廃語化したような言い方と区別の付けがたいもの、いわば、「一昔前」では済まないものが少なくない。[注25] 特にN類或いはN類に近いものとした言い方、具体的には項目4「まゆ」・9「うごろもち」・13「なめくじり」・19「かはづ」・25「つく〳〵し」の見出し語などは、歴史の深さに加え、分布状況からも京坂・江戸では使用場面が限られていた可能性がある。

近世後期の口語文献だけなく文語文献も調査していく必要がある。

［5］該当の言い方が『物類称呼』の見出し語として選択されたことの妥当性や意味については、今後の課題とすべき点が多い。

前項では、見出し語に広く共通して見られた性格について述べた。確かにそれはその言い方が見出し語として選択された理由の一端は説明しているであろう。特に文体価値の高さは共通語的性格の中でも他の言い方に対する優位性を説明する場合、有効である。

しかし、同じ意味項目に有力な言い方が別に存する場合、それが選択されなかった理由まで説明できなければ、該当の言い方が選択されたことを十全に説明したことにならない。

特に前項で例外となった項目5〈クロブシ〉・27〈ジューヤク〉については、これらが見出し語として選択された妥当性や意味が説明できていない上に、共通語的性格では優位にあると考えられる〈クルブシ〉〈ドクダミ〉が見出し語として選択されなかった理由も説明できていない。項目16〈トカケ〉も同様なところがある。

項目13「なめくじり」では見出し語〈ナメクジリ〉には一定の共通語的性格が認められる。しかし、それと同性格の〈ナメクジ〉が選択されなかったことは説明できていない。これは、項目4で〈マユ〉と〈マユゲ〉、項目19で〈カワズ〉と〈カエル〉などでも同様なところがある。また項目23〈リューキューイモ〉と〈サツマイモ〉、26〈ボーフラ〉と〈ボーブラ〉、29〈イカノボリ〉と〈タコ〉も同様で、古い文献の用例が得られないことも絡んで難しいところがある。それぞれ論中では一応の説明を施したものもあるが、十分ではない。

基本的に本稿ではある言い方が見出し語として選択されていることに関しては、出来るだけ歴史性・地域性更に場面性（文体性）という社会的な実態で解釈しようとした。しかし、これ以外に語源意識・規範意識また歌語・雅語意識など、吾山個人の捉え方（勿論、社会的な意識・認識の反映とすべき面もある）も考えた。更に『和名抄』『大和本草』など、先行文献との関連、就中後者に代表される本草書類との関連は閑却できない。

ただ、本稿で扱った項目の中でも『大和本草』に存しながら異なる言い方を見出し語とするなど、『物類称呼』の独自性が認められた。一方で、山県一九九六・九七にA類として示した如く見出し語の一致する項目も少なくない。これを無自覚的な引き写しとするか、しかるべき共通語的性格を認識し、それに照らした上での選択とするかは、見出し語を〈地域―方言形〉の記述と同列に扱えるかの議論も含め、今後一つひとつの項目について検討し、判断してゆくべき問題と考える。[注29]

とは言え、本稿は、『物類称呼』の見出し語の性格の検討と称しているが、すでにそれは出発点に過ぎなくなっている。今後は、『物類称呼』を離れ、共通語的性格を有することばの歴史的な研究の立場から、一つひとつの意味項目ごとに見出し語であった言い方を中心としながら様々な言い方を視野に入れ、近世後期から明治期の文献を広く調査して、それらの場面性（文体性）を明らかにしてゆかねばならない。

［6］近世後期の京坂・江戸のくつろいだ場面の言い方を考える際、『物類称呼』の〈地域―方言形〉の記述を参照した。

しかし、同時代の方言書類やLAJの分布相からそこに記された方言形が妥当であるか、疑問を感じることが少なくなかった。

今日的な「方言形」、即ち、くつろいだ場面で使われる言い方と判断できないところがあったためである。例えば、関西・京の言い方とされる項目4〈マユゲ〉・9〈ウゴロモチ〉については論中紙面を割いて述べることがあった。また文献や現代方言の分布状況から当時存在すると予想されながらも『物類称呼』に記されていない言い方は、項目4〈マイゲ〉・19〈カイル〉・20〈ガマガエル〉・30〈マツボックリ〉など、少なくなかった。

以上の如く『物類称呼』に示された方言形はくつろいだ場面の言い方としては綺麗すぎ、吾山によって整理されているのではないかと思われる節がある。これも別の方向ではあるが、今後の課題となる。

注

⑿ A類の見出し語に限らず、京坂・近畿地方出自の言い方は、江戸で次の①～③のような使われ方で受け入れられていたと予想される。この場合、ある使われ方から別の使われ方に移行することもあろうし、ある使われ方のままで今日に至っていることもあろう。

① 江戸で使うのは京坂・近畿地方出身者だけであったが、理解はされていた。

② 改まった場面の話し言葉や日常的な書き言葉で使われるだけで、それなりの地域色が感じられていた。

③ くつろいだ場面の話し言葉でも一般的に使われ、「上方臭」などの地域色はあまり感じられていなかった。

その他、話し言葉での使われ方でないが、本稿の場合、見出し語の性格付けのため、「④ 話し言葉では使われず死語化・廃語化しているが、特殊な書き言葉では使われていた」という使われ方も想定している。

このような江戸における場面性（文体性）の違いは、吾山と同程度の教養層を基本に考えてきた。しかし、階層によって京坂・近畿地方

出自の言い方の受け入れ方に違いのあることは言うまでもない。

(13) 〈クビス〉は『解説3』で「あまり多くなく、まとまった領域は認められない」（54頁）と記される如く、LAJで確認できた限りでは、〈キビス〉との併用も含め、福井・京都・鳥取・岡山・広島・山口の各府県で都合一〇数地点見られるだけである。『日本方言大辞典』でも〈クビス〉は兵庫県・奈良県・広島県・香川県が示されるだけである。

(14) 《京阪・東京に分布する》条件とは、見出し語が各市内・区内に1地点でも分布する場合は当然として、見出し語が他の変種と併用される場合、京阪では京都・大阪両市に見出し語が揃って見られる場合である。或いは、大阪市は除き、京都市の分布だけで類型化した方が問題が少なかったかも知れない。

(15) 『言海』では〈トーモロコシ〉〈ナンバンキビ〉ともに見出しに立てられている。しかし、「たうもろこし」は「[もろこしきびヲ略シテ、更に唐（タウ）ヲ加ヘタル語]なんばんきびノ一名。（関東）」だけであるが、「なんばんきび」は5行にわたる詳細な説明の後に「略シテ、ナンバ。一名、タウモロコシ。（関東）…」と記される。

(16) 『言海』では、「たこ」の項は「いかのぼりニ同ジ。（関東）」、「いか」の項は「いかのぼりノ略」と簡潔に済まされ、「いかのぼり」の項で8行にわたる詳細な説明が施されている。このような扱いなどから、〈イカノボリ〉は、日常の話し言葉の世界でなく、規範意識や語源意識の中に生き続けた言い方であると言えそうである。

(17) DKA 74によると、東京23区内は〈マユゲ〉〈マイゲ〉及び〈マミヤ〉〈マミエ〉が混在し、周辺地域もほぼ同傾向である。ただ、埼玉・東京・神奈川に限ると〈マミヤ〉が最も多い。

(18) 『和英語林集成』和英の部では、〈マユ〉〈マユゲ〉〈マミゲ〉が三つの版すべてに見られるが、マイアイ類が見出しに立てられることはない。しかし、英和の部「EYE-BROW」の項では初版〈マユ〉〈マミエ〉、二版・三版〈マユ〉〈マユゲ〉の如く、ママミアイ類が見られることもある。

(19) 『物類称呼』は「関西」の言い方として〈マユゲ〉を示すが、既述の如くLAJではまとまった分布領域を持たず、近畿地方では〈マイゲ〉が一般的である。この変化形はすでに『日葡辞書』に見られ、「Maigue. マイゲ（眉毛）または、Mayugue（眉毛）とも言い、むしろその方がまさる。」の如く、〈マユゲ〉との違いが記されている。従って、近世後期の京坂でも今日と同じく〈マイゲ〉は〈マユ〉〈マユゲ〉に対してくつろいだ場面で一般的な言い方であったと判断できる。従って、文体価値の点で京坂・江戸ともに〈マユ〉と〈マユゲ〉の違いは微妙なものだったかもしれない。

なお、【眉毛】の言い方については、小林隆氏の詳細な論がある（小林二〇〇一）。数多くの文献を駆使して語史が記述され、方言の分布と対照がなされている。ただ、近世後期を中心とした〈マユ〉の位置付けに関しては本稿で得られた結果と殆ど違いがない。このため、このような形で触れるに止める。

(20) 本項目では〈カワズ〉〈カエル〉とも使用地域が示されていない。この点からも〈地域―方言形〉の記述に見られる方言形〈ビッキ〉〈ビキ〉〈ヒキ〉などと異なった性格を有することが認められる。

本稿では見出し語を問題としてきたが、36項目中10項目に〈カエル〉の如き副見出し語が見られる。

項目2「たるひ」・項目5「つぶし」・項目6「くびす」
項目11「にはくなぶり」・項目18「いほじり」・項目21「よね」
項目27「しぶき」・項目29「きのこ」・項目30「まつふぐり」

これらの中には分布領域が見出し語より広い、或いは見出し語以上に歴史が深いなどとして論中言及したものがある。

簡単に見出し語と副見出し語を比較すると、まず副見出し語の方が見出し語より古い言い方である項目が多く（項目2「つらゝ」―「たるひ」、5「くろぶし」―「つぶし」、11「せきれい」―「にはくなぶり」、18「かまきり」―「いほじり」、27「じうやく」―「しぶき」）、見出し語の方が古い言い方である項目は限られる（項目29「たけ」―「きのこ」、30「まつかさ」―「まつふぐり」）。この場合、例外も存するが、副見出し語は京坂・江戸で死語化・廃語化したようなものが多い。

文献からその先後関係は明確でないが、従来の研究によって文体価値に違いがあると考えられる項目も存する（項目6「きびす」―「くびす」、21「こめ」―「よね」）。ただ、高い文体価値を持つと言われる言い方が見出し語に選ばれているのは、本項目だけである。

地域性では、殆どの場合、見出し語の方が副見出し語より分布領域が広い。この点で本項目と項目29「たけ」は例外で、副見出し語〈カエル〉〈キノコ〉が全国的に最大の分布領域を持つ。そして、10項目中この2項目だけ現代共通語形が副見出し語となっている。

本稿は副見出し語の性格を検討するものではないため、注で触れるに止めるが、見出し語の性格を別の観点から捉える方法の一つとして今後このような検討も必要である。

(21) 〈カイル〉は『日本国語大辞典（二版）』では「室町時代以降の用例で、特に口語で多く用いられた」として「玉塵抄」（一五六三）・「天草版伊曽保」（一五九三）などの用例が示される。また『和英語林集成』和英の部で〈カエル〉〈カワズ〉は初版・二版・三版、〈カイル〉は二版・三版に見られる（但し、英和の部「FROG」の項では〈カエル〉〈カワズ〉は三つの版に見られるが、〈カイル〉は見られない）。

ただ、LAJの凡例に〈カイル〉は見られず、その変化形と考えられる〈ケール〉も近畿地方には分布せず、関東地方も茨城・千葉・神奈川に散在する程度である。DKA 30でも〈カイル〉は多くない。

(22) 本項目の見出し形式は「踝 くろぶしっぶし」の如く副見出し語として〈ツブシ〉が示される。

副見出し語には項目19〈カエル〉・29〈キノコ〉の如くLAJで最大の分布領域を有する言い方がある一方、項目6〈クビス〉・11〈ニワクナブリ〉・21〈ヨネ〉・27〈シブキ〉の如く全くまたは殆ど分布領域を持たない言い方も存する。これら4語は、概ね上代・中古期の文献から見られ、文献に一定の用例を持っているが、その後話し言葉では使われなくなり、死語化・廃語化したような言い方である。これら以外の副見出し語も室町期の文献から一定の用例を持つ、歴史的に安定した言い方である。

しかし、本項目の副見出し語〈ツブシ〉は『日本国語大辞典（二版）』によっても「文明本節用集」の用例が示されるだけである。小林氏も「ツブブシの短縮形とみなされるが、中古末から中世の辞書にわずかに登場するのみである。… ツブフシに対して庶民の口頭語であったのかもしれない」（小林二〇〇四　229頁）とされる。

LAJの凡例に見られず、『日本方言大辞典』では「徳島県047　美馬郡816　愛媛県新居郡054」と記されるだけである。むしろ、〈ツブシ〉は『物類称呼』「膝　ひざ○豊州にて・つぶしといふ … 薩摩にて・ひざつぶしと云」（30頁）の如く【膝】の方言形として使われることが一般的である。

このような現代方言での状況は、項目6〈クビス〉などの如き歴史の深さのためでなく、京都の話し言葉であまり一般的でなかったことの反映と考えられる。

注⑳に示した如く副見出し語は見出し語以上に古い伝統的な言い方であることが多い。ちなみに、【踝】には〈クルブシ〉より古い言い方として『和名抄』など中古期の古辞書にも見られる「つぶふし」「つぶなき」が存する。しかし、これらが副見出し語に立てられることなく、新しく一般性が高いとは言いがたい〈ツブシ〉が示されている。これは、見出し語〈クロブシ〉と同じく副見出し語として例外である。

確かに本項目の如く見出し語・副見出し語がともに歴史的にあまり一般的でない言い方であることは、項目内で統一が取れているとは言える。しかし、伝統的で安定した言い方で統一された見出し形式「くるぶしっぶふし」がどの段階かで何らかの理由によって「くろぶしっぶし」と記された可能性も否定できない。

㉓ 前田氏は近世後期の江戸では〈ムグラモチ〉が一般的で〈モグラモチ〉は大正時代になって一般的に使われるようになったとする（前田一九八五　403頁）。しかし、〈モグラモチ〉は前掲の如く『浪花聞書』『東京京阪言語違』に見られる。また『和英語林集成（初版・二版・三版）』「MOGURAMOCHI, モグラモチ, See Muguramochi」の記述から明治期以前から〈ムグラモチ〉より文体価値の低い言い方として盛んに使われていたと予想される（山県一九九七　注⑲参照）。

㉔ 本稿で見出し語の分布を類型化する場合、原則として見出し語と「同一」と認められる方言形を対象にした。

この場合、どの程度までの違いを同一と認めるか難しいところがある。例えば、〈ウマ〉に対する〈ンマ〉は音声変種として問題なかろう。また注⑩に記したが、〈ツクツクシ〉と〈ツクヅクシ〉はLAJの凡例で揺れとして処理してあるため、同じく同一と認めた。しかし、清濁の違いに関して、〈トカケ〉と〈トカゲ〉、〈ボーフラ〉と〈ボーブラ〉、〈カカシ〉と〈カガシ〉は『物類称呼』でも違いが意識されることがあり、それぞれ固有の分布領域を持っていた。母音の違いに過ぎない〈クロブシ〉と〈クルブシ〉も同じく有意な語形差である。

その他、〈トンボ〉と〈トンボー〉、〈カタツブリ〉と〈カタツムリ〉は同一と認めるが、〈ナンバンキビ〉と〈ナンバキビ〉は同一と認め

ないなど、意味項目（分布図）ごとに同一とする基準が異なっていた。

しかし、一方で〈カボチャ〉〈トーモロコシ〉などと対比させる場合はボーブラ類・ナンバン類として類似形をまとめた。このまとめ方は意味項目（分布図）ごとに他の変種との形式の違いに応じ、また何を目的とする作業であるかに応じて異なることになる。ただ、この【土竜】の諸変種の場合、他の項目に比べると全体に形式の違いが微妙で、まとめ方が難しい。しかし、他の項目の例から考えて原則①「一・二・三音節目の子音・母音の違い」は音声的なユレで、類似形としてまとめても問題はないと判断した。

(25) 本稿ではくつろいだ場面の話し言葉に対する上位場面として改まった場面の話し言葉や書き言葉を設定し、対立的に捉えてきた。

ただ、上位場面として一括しながら改まった場面の話し言葉と書き言葉との違いは一切触れなかった。

「江戸共通語」は、土屋氏の条件①によると、話し言葉と限定され、書き言葉は問題とならない。しかし、見出し語の性格を検討し、特に文体価値を考えていく場合には書き言葉での使われ方は無視できない。

基本的には本稿で言う「書き言葉」は近世文語文で「伝統の基調を形成し文語の典型と目される平安時代の和文の言語を主流とするが、漢の方の要素も柔軟に取り入れ、さらに中世語の要素も注ぎこんでいるうえに、… 当代の口語の影響によると考えられるものや口語そのものの混入ということがみられもする」（鈴木二〇〇三　6頁）文体である。

この鈴木氏の定義から明らかな如く近世の文語文は文体的な幅の広さを特徴とする。このとき、文法レベルでは、上代・中古期の助詞・助動詞を文末中心に配置する点で文体的な幅は相対的に小さかろう。しかし、語彙レベルでは、改まった場面の話し言葉の延長線上にあって一般に理解される単語を用いる場合から、上代・中古期にしか見られない、当時すでに死語化・廃語化して、一般には理解しがたい単語を用いる場合まで文体的な幅は広いと予想される。

この場合、前者は、鈴木氏に従えば、当代の口語の混入の著しい書き言葉で、後者は、古典の素養を有する知識層に限られる特殊な書き言葉と言える。勿論、この両者は、くつろいだ場面の話し言葉と改まった場面の話し言葉と同じく連続的なものであろう。

本稿では、右の如き典型的な二タイプの書き言葉をそれぞれ「日常的な書き言葉」「特殊な書き言葉」と称している。

(26) 注(1)でも述べたが、本稿は前提として該当の言い方が『物類称呼』の見出し語として選択されていることは、当時の江戸において共通語的な性格を有するという社会的な実態を反映したものと考えるが、併せて見出し語として選択する吾山の意図の重要性も指摘した。

しかし、田籠博氏のご指摘（田籠二〇〇四）を待つまでもなく、注(1)でも触れ、山県一九九五や山県一九九六・九七に記したように、先行文献、特に『大和本草』を初めとする本草書類との関係は、〈地域―方言形〉の記述に限らず、見出し語に関しても、本稿で扱った36項目中24項目を占める「生植」「動物」を中心に無視できないものである。

論中項目9「うごろもち」・27「じうやく」などの見出し語につい

ては『大和本草』との記述の違い、即ち、『物類称呼』の独自性について触れたが、これらも広く文献を調査していけば「出典」が発見できるかも知れない。また先行の本草書類との関係の深さが「一昔前から使われてきた京坂語」となっているのかも知れない。

ただ、『物類称呼』の出典探しを行い、引き写しの多さを指摘して、その独自性の低さを殊更に強調することは生産的でない。共通語的性格を有することばの歴史的な研究の立場からは、『物類称呼』を一つの完結した自立的な存在として捉え、その見出し語の性格をいろいろな観点から捉えてゆくことが必要と考える。勿論、考察の結果、先行文献の引き写しなどのため、ある見出し語が共通語的性格を有さないことが判明するかも知れない。実際、本稿でも事情は別にありそうであるが、そのような可能性の高い見出し語が認められた。しかし、LAJに採用される一般的な項目を対象したことも一因であるかも知れないが、本稿の検討の限りではそのような見出し語はむしろ例外に属する。

勿論、論中「見出し語の選択」という形で吾山の意図を重視しているかのような表現をとってはいる。しかし、あくまでも本稿の基本的な立場は、『物類称呼』に示された見出し語が近世後期当時共通語的な性格を有していたか、そのような社会的な実態を反映していたかを検討することである。

◇参考文献・引用文献等

大橋勝男（一九七六）『関東地方域方言事象分布地図　3』（桜楓社）

国立国語研究所編（一九六六～七四）『日本言語地図　1～6』（大蔵省印刷局）

小林　隆（一九八二）「文献と方言分布からみた〈くるぶし（踝）〉の語史」『国語学研究』―22（本文は小林二〇〇四による）

――（二〇〇一）「『眉毛』の語史―文献と方言の対照から―」『国語語彙史の研究』―20（本文は小林二〇〇四による）

――（二〇〇四）『方言学的日本語史の方法』（ひつじ書房）

佐藤喜代治編（一九八三）『講座日本語の語彙　9～11　語誌①～③』（明治書院）

尚学図書編（一九八九）『日本方言大辞典』（小学館）

鈴木丹士郎（二〇〇三）『近世文語の研究』（東京堂出版）

田籠　博（二〇〇四）「近世の方言」『日本語学』23―12

土屋信一（一九八七）「江戸共通語をめぐって」『香川大学国文研究』―12

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（二〇〇〇～〇二）『日本国語大辞典（第二版）』（小学館）

前田　勇（一九七九）『講談社学術文庫・江戸語の辞典』（講談社）

前田富祺（一九六九・七〇）「モグラの語史　上・中」『日本文学ノート』―4・5（本文は前田一九八五による）

――（一九七九）「言語地理学から国語史へのアプローチ　―かかとの呼び方をめぐって―」『国語学』―119（本文は前田一九八五による）

――（一九八五）『国語語彙史研究』（明治書院）

山県　浩（一九九五）「江戸共通語資料としての『物類称呼』　―先行本草書との関連性―」『群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編』―44
――（一九九六・九七）「江戸共通語資料としての『物類称呼』（上）（下）―見出し語の歴史性を中心に―」『群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編』―45・46
――（一九九八）「『物類称呼』の見出し語　―江戸共通語史での位置―」『群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編』―47
――（二〇〇一）「近世方言書の上方語　―『仙台言葉以呂波寄』『燈心野語』を中心に―」『筑紫語学論叢』（風間書房）
――（二〇〇三）「『物類称呼』の見出し語　―地域性の全体的傾向―」『福岡大学日本語日本文学』―13

＊　＊　＊

宇佐美英機校訂（一九九六～二〇〇二）『岩波文庫・近世風俗志（一）～（五）』（岩波書店）
奥村三雄編著（一九八九）『九州方言の史的研究』（桜楓社）
菊池武人編（一九九五）『近世仙台方言書　翻刻編』（明治書院）
白井光太郎（一九九二）『大和本草―Ⅰ・Ⅱ』（有明書房）
神保五彌校注（一九八九）『新日本古典文学大系　浮世風呂他』（岩波書店）
土屋信一（一九九九）「東京京阪言語違のことば」『近代語研究―10』（武蔵野書院）
中村幸彦校注（一九六二）『日本古典文学大系　春色梅児誉美』（岩波書店）
福井久蔵編（一九七五）『国語学大系　方言二』（国書刊行会）
本田康雄校注（一九八二）『新潮日本古典集成　浮世床・四十八癖』（新潮社）
正宗敦夫編（一九三一）『日本古典全集・第四期・片言付補遺物類称呼　浪花聞書　丹波通辞』（日本古典全集刊行会）
三矢重松（一九三〇）『庄内語及語釈』（刀江書院）
武藤康史解説（二〇〇四）『ちくま学芸文庫・言海［昭和六年版］』（筑摩書房）
和田万吉校訂（一九三〇・三一）『岩波文庫・椿説弓張月　上・中・下』（岩波書店）

◇調査文献

※論中引用した近世以降の文献と出典は、次の如くである。
※基本的に本稿（下）で直接的・間接的に利用したものに限った。但し、調査資料とした中古期からの古辞書類に関するものは、重複を避けるため、省略した。

『大和本草』（一七〇九刊）＝白井一九九二
『仙台言葉以呂波寄』（一七二〇序）＝菊池一九九五
『燈心野語』（一七三六序）＝菊池一九九五
『浜荻（庄内）』（一七七六以降）＝三矢一九三〇
『御国通辞』（一七九〇）＝福井一九七五
『椿説弓張月』（一八〇七～一一）＝和田一九三〇・三一
『浮世風呂』（一八〇九～一三）＝神保一九八九

『浮世床』（一八一三～二三）＝本田一九八二
『浜荻（仙台）』（一八一三頃）＝菊池一九九五
『仙台方言』（一八一七頃）＝菊池一九九五
『浪花聞書』（一八一九頃）＝正宗一九三一
『方言達用抄』（一八二七序）＝菊池一九九五
『春色梅児誉美』（一八三二・三三）＝中村一九六二
『はまおぎ（久留米）』（一八五二頃）＝奥村一九八九
『守貞謾稿』（一八五三概略）＝宇佐美一九九六～二〇〇二
『常陸方言』（未詳）＝福井一九七五
『筑紫方言』（文化文政以降）＝福井一九七五
『東京京阪言語違』（一八八六）＝土屋一九九九
『言海』（一八九一）＝武藤二〇〇四

【最終稿二〇〇四年一〇月七日】

◇前号（上）の訂正

○118頁下段
10行目＝（誤）見出し語と併用される…
↓（正）見出し語などと併用される…
14行目＝（誤）16「とかけ」＝〈カガミッチョ〉
↓（正）16「とかけ」＝〈カガミッチョ〉〈トカゲ〉
○122頁上段
1行目＝（誤）書き言葉で使われるもの…
↓（正）特殊な書き言葉で使われるもの…
3行目＝（誤）話し言葉・改まった場面で使われるもの…
↓（正）話し言葉・改まった場面や日常的な書き言葉で使われるもの…